

報告

神田小川町
「漢陽楼」食事会

村田嘉明（会員）

協会監事の佐藤嘉信氏の呼びかけで「周恩来ゆかりの店・漢陽楼」で会員昼食会に参加した。神田小川町「漢陽楼」は明治時代から続く中国浙江料理の名店だ。中華人民共和国建国の功労者・革命家周恩来は天津から1919年〜1921年（19歳〜21歳）日本に留学を果たした。中国人留学生が多く住む神田界隈の学生下宿に住み、足しげく通っていた店が「漢陽楼」で、故郷・浙江省の故郷の味を楽しんでいた。

2022年11月8日、正午に参加者7名が「漢陽楼」で中国料理のランチに舌鼓を打った。参加動機は2022年9月29日（50年前の日中国交正常化調印）のNHK特集「日中国交正常化50年」で、直木賞作家、浅田次郎が「漢陽楼」の円形テーブルで「肉団子スープ」や「獅子頭」を食べている映像を見た。テレビ視聴時、この明治時

代から営業している

「漢陽楼」で食事をしたかと思っていたとき、会員の佐藤嘉信さんから食事会の案内を受け申込んだ。

映像では協会会員の古海建一さんと田畑光永さんが取材を受け、出演された。参加者は食事会幹事の監事佐藤嘉信さん、常任監事の藤沼哲朗さん、前理事の佐野吉秀さん、監事の塚原美津子さん、常務理事の渡辺澄江さん、理事の日野正子さんと私である。

この歴史ある中国料理の名店で会員交流ができたことは収穫だった。着席した円形テーブルの壁に周恩来が19歳のとき、日本留学出発の前夜につくった七言絶句「大江歌罷」の額装が掲示されていた。次はその邦訳。



漢陽楼店内集合写真（テーブル後ろの周恩来の「大江歌罷」の額前にて）

長江に歌うのを止め、意を決して東の日本に向かい科学をしっかりと学び、貧しい祖国を救おう。達磨のように10年間、壁と向き合い、その壁を破ろうとし、それが果たせず、海を渡るのも、また英雄だ。

「漢陽楼」の初代店主の顧雲生は周恩来と同じ浙江省出身、ロシア銀行の厨房で働くも失職、中国人向け下宿を開業したが、1911年の辛亥革命で日本への留学生が減り下宿業は難しくなった。留学を終え帰国する留学生が、お世話になった「お礼」にと漢陽楼の屋号と手作り看板を店主に寄贈し創業した。

漢陽楼は漢民族を燦々と照らす楼閣の意味、当初は留学生専門の店、一階は食堂、二階は留学生の溜り場、周恩来は慣れない日本食が口に合わず漢陽楼で故郷の味、肉団子スープ蒸「獅子頭」などを食べ故郷の味を楽しんでいた。当時の神保町は140店もの中華料理店が並ぶ中華街、学生街だった。